

論点：「日本から世界へ向け創意を発信するために その活動環境を“変える”ことについての“原点”を考える」

2017.5.2 南 節雄

1) 創意・工夫、考え方の技術」としての一思考過程

日本が欧米から現代文明・文化を本格的に取り入れ始めた明治維新・文明開化より 150 年になる。学ぶことから始まっているいろいろ考えて今日の発展をしてきた。その“癖”は今日でも変わらないのではないかと思う。‘90 年代初期のバブル崩壊から今日、アジア諸国、とりわけ韓国・中国が台頭・急迫してきている現状がある。日本がどうしたらよいかという転換期に来ていることは衆目の一致することである。日本が欧米と肩を並べるか一步先んずることが出来るかを考える時期に来ている。その為には、“世界に先駆けて新たなことを考える姿勢に転換していくこと”が肝要になってくる。どうしたらそういうことが出来るのであろうか。以下、このことについて考えていることを述べる。

‘90 年前より“「絵」の言語”に興味を懐いてきて今日に至っている。IT 全盛の今、その実現が益々現実味を増している。その頃から人類の発展と「言語」（広い意味で学術・芸術の問題向き言語を含む）との相関が重要関心事に思うようになってきた。人類学者赤澤威先生(高知工科大学教授)の研究に因れば「ネアンデルタールは二十万年前にヨーロッパに出現、四万年前に姿を消した、一方現代人類(ホモ・サピエンス)の祖先にあたるプロトクロマニオンがそこに姿を見せたのが十萬年前、双方が共存していたと考えられる。なぜ、プロトクロマニオンが残る交代劇が起きたのか」「ヒトの進化は交代劇の繰り返しでした。過去の交代劇で去って行った人類は、三つの悩み(食べ物を確保する、子孫を残す、外敵から身を守る)を克服できなかったからではないか。最新の交代劇で退場したネアンデルタールは恐らく悩みを克服するための言語能力に弱点があったのではないのでしょうか」とみる(‘05. 11. 25. 日経夕刊コラム「赤澤威さんに聞く」より)。京大霊長類研究所教授 正高信男先生のお話を聴いた。現代人類の祖先の出現は「言語遺伝子」の発見に因るとその形が現在のようになったのはごく最近のことで、計算によると 1 万年から 10 万年間の公算が強く、大きくて 30 万年をさかのぼらない、という。いわゆる、人間が他人と会話し思考をめぐらすようになった段階をサルから異なる存在になった時とみなすと、その頃だという(NHK人間講座 ‘04. 12. ~ ‘05. 1. 正高信男「人間性の進化史」より)。即ち、現代人類(ホモ・サピエンス)は「言語」というコミュニケーション手段を必要に応じてどんどん創りつつこれを介して、学術・芸術の進展に至るまで、時間・空間において人類相互の連携を取って今日に至るまでの進展を成し遂げてきたことは現実として受容せざるを得ないことである。何故欧州が現代文明を最先端に発展し得たのかはともかく、ここでは事実として受け止めたい。現代人類の発展と「言語」は“考えること”の原点になると考える。

次に、人類相互が「言語」・コミュニケーションを携って活動する際の「行動三つの原則」について触れたい。すなわち、

- 1 第一人称的モチベーション：自らは責任を持って前向きに行動する
- 2 第二人称的モチベーション：相手の身になる
- 3 第三人称的モチベーション：場を認識する

である。これらの意味は自明である。そして、「言語」を活用することはこれらのどの段階にも必要であることは言うまでもない。でも、どうであろう。モチベーション(動機づけ)という観点で見れば 1 から 2 へ、2 から 3 へと、人が関係する場の環境へと参画する段階として行動レベルの趣の異なる価値が出現してくるのである。関係する人々が 1~3 のレベルまでを統合的に認識すれば、1 つの集団として機能することが出来て、個々人相互間の価値が“場に融合する”ことによって、ホロニクスという生物組織体としてのより高い価値創造の出現と同じ様に“個々にはなかったレベルの高い価値が生まれてくる”のではないか。ここでの 1~3 までの整った集合全体がまたひとつの「個」として参加でき、さらには大きな価値の創出に寄与する、ということはホロニクスで言われていることではある。それはとも

かく、さて、1～3のプロセスは個々が繋がりをを持って大きな知恵を育むために欠かせない段階と取れる。即ち、第3のプロセスでは参画する人々が醸し出す雰囲気「場」の醸成に寄与して、ひとつの「環境」が出現していくのではないかと考える。その環境は参画する人々の人格、経験、知識、などによって影響されるのではないかと。それにしても、我々個人がこの三つの行動段階を1～3に進むに従ってその実現性の度合いに困難さが増してくるのは必然なのかも知れないのである。「人」が、「個」（人々が集まって集団を成すときにこれを単位にするなら、こう呼ぶのが相応しい）が行動をする際、結果どのレベルの行動であったかは価値の創造にどう寄与するかに関係してくると考える。1の段階が大事でないといっているのでは決してない。まずは、それぞれの自らが発することから始まる。小生の勝手ながらの言い方をすれば、1から3にいくにしたがって主観から客観化へと価値が高まっていくプロセスと言えるのではないだろうか。“本物になる”プロセスと言えるかも知れない。

以上、“考えること”への「原点」となる二つの論拠を挙げた。これらは、本質的なことを捉えて外さずに論じるために大事になる。即ち、

- A. 「言語」は人々が考えてことをなす為に必須の手段である。
 ときには、進展の為に新たな「言語」を作り出すことが必要になる。
- B. 「行動三つの原則」は考えてことをなす為に肝要な行動プロセスと考える。
 殊に、第3プロセスまで完結させていくことが“本物にする”ために欠かせない。

そこで、A. からは、我々の進展のためには、“コミュニケーションを摂る”（コンセプト）ことと、“世界を知る”（ビジョン）ことが欠かすことの出来ない必然として言えるのではないかと。これは全ての行動に関係する。この「『言語』を駆使し『コミュニケーションを摂る』こと」こそが“現代人類”が人類相互の頭脳群を融合し合い「場」を醸成し合い一人では決して到達し得ないレベルの価値を創出・発展させてきた“根幹”ではないかと見る。

さて、B. からは、本題の「論点」について「取り組むべき基本課題」を提示することができる。すなわち、創造性豊かな研究開発を実現していくためにはその環境変えることから取り組む必要がある。それは、基本課題として、次の三つであると考えます。

- ・創造性を育み・高める“行為”について「取り組むべき基本課題」：
 - I. 基本課題1：テーマを出現させることに関し、その本質を表現し得る“コンセプト”とそのための“ビジョン”を創り出すこと。
 — まず考えることから始める —
 - II. 基本課題2：“新しい”リーダーシップ像を養成すること。
 即ち、“個々が創造能力を高めるポテンシャル力を持つことは勿論、異質な人との連携力、気持が通じ合う“心”を備えるなど、参加した新しい「場」に融け込み、“頭脳群”が融合されていくこと、その結果として「場」の涵養に貢献していけること”。
 — “コミュニケーションを摂る” —
 - III. 基本課題3：“本質を捉えた豊かな創造性を育む場の環境”が醸成されること。
 必要な“伝統・文化・土壌”が醸成されていく「世界」が創られていく。
 — 時空間の場で本質の根源を共有する —

本題の「論点」については、新しいテーマ課題に取り組む為には、この三つの基本課題を外すことは出来ないのではないかと。基本課題1は「テーマに関する」こと、2は「人材育成に関する」こと、3は活動のための「環境と場作りに関する」ことである。基本課題1、2、3ともいずれも肝要であるが、殊に3は本題の主旨に我々が最も根幹とすべく肝要な課題であるとみる。欧米でも、日本でも、世界のどこでも、もし世の中に新しいチャレンジングなことを為し遂げたことがあるとすれば、この三つを必ず包含した取り組みがなされているに違いない。考えることの「原点」に戻り、取り組むことが必要に思える。以下に、この基本課題についてどう取り組むかの視点を述べる。

2) 提案：「— ソフトテクノロジー的開拓 三つの基本課題 —」の取り組み視点について

これは、「ソフトテクノロジー的開拓のすすめ」での三つの基本課題をどう具現化していくのか、その取り組み方の視点についての提案である。

即ち、世に類例の無い創造的な考え方を創り出したい。そして、それに伴う新しい技術、もの、或いは場を生み出したい。そのためのソフトテクノロジー“創意工夫・考え方の技術”を育み、確立していきませんか、という主旨である。そして、取り組むべき姿勢は、地球環境保全を大前提にして、豊かな社会作りに貢献すべく、市場創出とこれに見合う技術創出を行なっていく。その際、出来ればワールドワイドに知恵創りのネットワーキングで目的を達成させていきたい。

さて、豊かな社会の実現のためにはどんなに技術を充実させていっても最後には現出化される課題はこれらを使う社会および社会を担う人間に還ってくるはずです。端的に云えば、“至便な社会環境に置かれた人間は大概 頭脳・身体は後退化して行かざるを得ず、揚げ句にはまた不満が出てくる”といった状況が見えてくるようです。このようなことにならない為にはまさに“心の涵養”の視点を外さないで取り組む必要がある。

このようなことを意識下において、基本的課題の取り組み視点について以下概説したい。

(1) コンセプト・ビジョン創りについて：基本課題1；— まず考えることから始める —

テーマに関わるロードマップの先はやはりコンセプト・ビジョンである。これは、これまで世に類例のない創造性の高いテーマを発掘し・育成する為の指標として欠かせないものである。

これをどう創り、どう具現化して育成していくかの、その創り方を探究する。

基本問題については、例えば次の様なものがあるか。

- ・ 自然環境破壊
- ・ 社会組織現象：相互理解の欠如⇔“縦割り”の弊害、等
- ・ 心の交流をどうしていくべきか
- ・ 豊かな感性の育み＝人間尊厳の原点
- ・ 人間本来が必要とする“考える力”の醸成⇔教育問題、等
- ・ 健康問題、予防医学⇒終生活動できる心身体づくり
- ・ 安全・安心の問題

こういったことにどう取り組むのか、そのコンセプトの構築をする必要がある。

(2) 人材育成作りについて：基本課題2；— “コミュニケーションを摂る” —

創造能力を高めるポテンシャル力を持つことは勿論、異質な人との連携力を保有していくことは肝要なことです。

昨今の世情では心の問題の重要さを痛感させられることが多々あります。

積極的には人と人との心のつながりのできる為の諸課題を人間育成に向けてどう養ってイけるかを探究する。

そして、創造性ある課題を創り、これを解いていく為には やはりそういう面での人材育成が肝要である。個々ばらばらでない人との“心”のつながりで“大きな頭脳を形成していき、目的を達成してイける”ことの探究を行う。

昨今、人間本来のコミュニケーション能力(“現代人”本来の能力)に“赤信号”の警告が聞かれる。根幹は、コミュニケーション能力の不足が始まっている、のかも知れない。何故そうなったのだろうか。現代人が追求してきた利便性・金儲け、等 重視の姿勢は人間本来の基本ではなく、人間の心とのバランス力を欠いてきたのではないだろうか。

今、心の感性・信頼性での交流が必要になってきている。その為には、“新たなリーダーシップ像”をしっかりと構築する必要があるのではないか。

- ・相手とのコミュニケーションをしっかりと持てる人
- ・「場」作りのできる人、メンバーが協力しあう「場」とは、等の探究に取り組む必要がある。

(3)環境の場作りについて：基本課題3；— 時空間の場での本質を共有する，“世界を知る”—

「主観」から「客観化」へは環境・場の涵養には重要である。そして、参加した人達が「場」に融け込み、“頭脳群”が融合され“大きな能力”が発現されていくためには環境・場の影響が欠かせないのである。

人間を含む生物全体は互いに環境から大きな影響を受けている。例えば、燦燦と降りそそぐ太陽の光の恩恵がある南海諸島の動植物は何であれ煌びやかで華やかな姿・形をしているのだろうか。また、カメレオンや海の蛸は外敵によって周りの自然の配色・格好に早変わりして身を守る。世代を通してああいう“能力”を培ってきたのであろう。

人間においても例外ではない。幾世代を通して進化してきたことは勿論、文化人類学者によれば人間の肌の色や姿格好はその土地の環境に変わるのに2000年かかるという。

ここでは、自然環境と人間の係わり合いを述べるつもりはないし、その力もないが、本題の創造能力を高めていける環境作りが如何に肝要なことであるかを知っていく必要がある。

さて、場作りであるが、やはり地球環境保全を大前提にして活動環境を考えることは当然である。

この場作りについては、物理的環境、質的環境、心の環境作り、といったことが考えられる。その為に、システムティックな体系を組むことが大事になろう。また、雰囲気作りに関して、文化・土壌づくりがいい意味での伝統として構築されていく。そして、質的環境作りとして人間の「考える」プロセスの能力を磨いて本質を捉えていける取り組みができるようにしたい。そして、考え方が完結できる「世界」を構成していけるといい。その為に、チーム編成はまた大事になる。それには、どう選ぶのかの基本的な考え方、どう見つけるのかの考え方、が重要になって来よう。その資とは何なのか、そして参加メンバー全員がどうリンクしてネットワークとして「世界」を構築するのに寄与するのか、等々のこういったことの探究をしていく必要がある。これらの視点が探究に大事なのでは、と思うのである。

以上、三つの基本課題の取り組みの視点について述べてみた。まだまだ、考え方として足りないところがあると思います。関係の方々で補い合って戴ければ幸いです。これからの探究を進めることに従ってより本ものへの探究の道筋が見えてくるのではないだろうか。是非、新たな三つの基本課題への取り組みに挑戦していくべきと考えます。

さて、取り組みに際して今ひとつ重要な視点がある。それは、三つの基本課題はそれぞれ単独に切り離して取り組むのではなく、これら三つが是非システムティックに連携してその相乗・総合の効果を発揮できるように考えていけるべきである。その結果目的を達成する行為とともに人間成長の育成が行なわれていく、いわゆる一石二鳥の醸成ができるといい。このことは実に肝要なことである。

この資料の原本は2007.6.27にまとめたものです。

実際力があるかの吟味には、当時の時代状況下での著作しましたものですが、大きな見方では、現在下におきましてもそう大きなズレはないのではとっております。